

東京バッハ合唱団創立 39 周年記念 懇親会&シンポジウム 記録

心・くらし・歌

(2001 年 7 月 2 日、目白聖公会)

はじめに

大村 恵美子

昨年の創立記念会に、思い立って 4 人の後援会員の方々から、「私のバッハ体験」のようなテーマの内容で、お話をしていただいたのがとても好評で、今年もまたそのスタイルで、ということになりました。

前々から私は、ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ語学校）の〈同級生〉だった、務台孝尚（むたいこうしょう）様、丸山真人（まるやままこと）様のお 2 人が、20 年あまりも後援会員をつづけてくださることに、感謝をおぼえ、なんとかお目にかかれる機会がないのかという希望をもちつづけていたのですが、今年の元旦に、偶然、福井の永平寺を訪ねたときに、このお 2 人を、今年の創立記念日の講師にお招きしたら、というアイデアが浮かびました。

お 2 人との連絡の結果、ご快諾を得て、このしあわせで意欲的な〈同窓会〉が実現することになりました。テーマは、広く生きる内容に関して、ご専門の立場からでも、ご自由にお話しいただければとお願いしました。また私の側からは、この 20 年間、支援をつづけてくださった、その情熱といいましょうか、〈ふしぎのみわざ〉は、どこから来るものなのだろうか、という秘密を明かしていただけたら、ということも、うかがいたいことのひとつです。

長野県の塩尻のほうから、はるばるいらしてくださった務台孝尚さんからはじめていただきましょうか。

「生老病死」を受け入れて、楽しく生きる

務台 孝尚（後援会員）

現在私は、生まれ育った実家である曹洞宗宗福寺の副住職をしております。兄弟がおりませんので、幼少のころより、「寺を自分が継ぐのである」とい

ふかかたにレールをたのまふ少い、フロにエフ、わります。

東京バッハ合唱団との関わりは、ゲーテ・インスティトゥートの同じクラスで大村さんとご一緒になりまして、たまたま「マタイ受難曲」の練習に誘われて、1982 年新宿文化センターで歌わせていただきました。その後、〈ばつはめいと〉の個人レッスンにも参加し、田中奈美子先生よりご指導を受け、いちど渋谷で行なわれた発表会で、シューベルトの「菩提樹」を歌ったこともありました。駒沢大学の大学院、宗学研究所で勉学をつづける間、合唱団の後援会員になっておりましたが、それが現在までつづいております。

音楽は、ただ無性に好きであるということだけで、よくわからないのですが、私どもの曹洞宗では、梅花流の詠讃歌を勉強しております。

長野県では、松本近辺ですと「サイトウ記念オーケストラ」とか鈴木鎮一氏の器楽の才能教育等、音楽にふれる機会はけっこうあります。私のこどもたちも、5 歳、6 歳、8 歳の 3 人おりますが、それぞれヴァイオリンをやっており、それを聞きながらあれこれと雑事を行ったりして、毎日たのしく過ごしております。

「生きる」ということは、やはり楽しく、煩わしいことにはあまり執着せず、仕事のこと、生計のことなど、一つのことにとこだわらないで生きたいものです。一つのことにとこだわりますと、その一事を追い払うのに、つぎつぎといくつもの煩惱が湧いてきまして、何がなんだか解決がつかなくなってしまう。一日一日を楽しく過ごせればいちばん良いのではないのでしょうか。

お釈迦さまの教えのなかで、「一切皆苦」と申しまして、すべては苦であると説いております。人間の一生を考えたとき、生老病死、この四苦ですね。まあ、苦であると思えば苦であります。苦でないと思えば苦ではない。とにかく、生まれてから死ぬまで、この 4 つは避けることはできないということです。

私は中学生のころから葬儀にかり出されました。初めてのときは、他人の死（なくなるということ）でもポロポロと無性に涙がこぼれて止まりませんでした。「どうしてだろう」と考えても分からなかったのですが、3回ほど葬儀に参列したころからは、涙もしだいになくなりました。不思議なものです。

高校生のころからか、「人は必ず死ぬもの」という思いが体にしみついていました。世間の人々は、よく「年はとりたくない」とか「若くなりたい」などといいます。しかし、そのような逆戻りは、いくら願ってみてもできないことです。この「老いること」に対して非常に執着をする人がおりますが、あまり執着して話すのを聞かされると、ほんとうに胸がムカムカしてまいります。それで、太古のむかしより不老不死の薬などが考案されたりしてきましたが、人間の寿命というものは、長いといってもせいぜい120歳くらい、150歳までは生きられません。一方においては、人は生まれたときに、すでに寿命が決まっているとも言われております。長生きをすれば、それだけ自分のしたいことが余計にできるようにも思われますが、それよりも、この限られた人生のなかで、「自分がどのように生きたら」と考えて生きていったほうが良いかと思えます。

生きている人はさまざまで、事故で亡くなる人、病気で亡くなる人、幼くして亡くなる人、長寿をまっとうする人、いろいろです。いずれは己の寿命が尽きるのでありますから、このことを自分自身のこととして受けとっていただきたいと思えます。

昔は、今とくらべて、死というものを目のあたりに体験することが多かったと思えます。医学の未発達、貧困、それに戦争、といういろいろな場面で、死への準備教育がおのずと培われておりました。現在では、科学の進歩などにともない、多少なりとも長寿とはなりましたが、わずかに過ぎません。かえって、厳然と存在する「生老病死」の四苦を自然に受け入れて、そこからいろいろなことに対処して、楽しく生きてゆけば最高であると思えます。

大村：ありがとうございます。さらに詳しいお話を、のちほど伺いたいと思えます。

いちおうここで一段落させていただいて、次に丸山真人さんのお話をお願いします。丸山さんとお話しすると、ソフトでとても快適なのですが、ときどきご恵送くださる本を読むと、これがみんなむつかしいのです。この機会に、心あらためて、なんとか丸山さんのことを理解しようと思っています。



お金で勘定できないバックボーン

丸山 真人（後援会員）

まず名前のことから始めます。丸山真人(まこと)と申します。一字違いで有名な丸山真男(まさお)という学者がおられて、よくきかれるのですが、この先生とはまったくつながりはありません。祖先を調べれば何かみつけるということもありうるでしょうけれど。

大村さんや務台さんと知り合った20年前ころ、私はドイツに留学したいと思ってゲーテ・インスティトゥートに通ったのでした。地域経済のことに興味があって、ドイツでは地域共同体がよく機能していて、ネットワークがしっかりしている、例のSparkasse（貯蓄銀行）のことなど、どこかの町に暮らして、調べてみたいという思いで留学にそなえ、週4日のインテンシヴコースに入ったのです。そのときにお2人が同級生だったのです。

大村さんからは、月報が出るごとにいただいて、このままいただきつづけるのも申し訳なく、後援会に入ったのだと思えます。ここでは意外と人とのつながりがあって、1988年、私がはじめて務めたのが明治学院大学の国際学部で、そのときの学長が森井眞先生でした。

月報はよく読むので、その時々いろいろな思いがありますが、たとえば武者小路規子さん。彼女も生活学の講師をしていらして、お昼にときどき食堂でお会いすることがありました。私の研究領域とつながるものがあるなと思っていました。それが突然亡くなられたことを月報で知って、人の生き方にもいろいろあることに、深いショックをおぼえました。

そんなふうには、この合唱団は、単なる歌の同好会でなく、非常に豊かなものを蔵している集まりだと思えます。私の場合、むしろ月報の後援会員、という色合いが強いかもかもしれません。

さて、私の生活にとって、大きな影響を受けたのは、恩師玉野井芳郎先生ですが、当時の経済学の2つの大きな流れとなっていた、マルクス経済学と近代経済学との間にコミュニケーションをはかろう、と主張しつづけ、そうしているうちに「広義経済学」という、人類学にも近いものに至ったわけです。

人間社会のなかには、お金で解決できる問題とできない問題とがある、まあ一般の目から見ればあたりまえのことですが。その、お金で解決できない部分を、経済学のなかでも明らかにしよう、ということで、衣食住などの物質に関する人間の生活の、お金の勘定で出てこない部分に、バックボーンが秘められている、と見るのです。それで、私は、自分の専門を経済人類学と考えています。

私の現在所属している、駒場にある東大大学院総合文化研究科では、いろいろな学問分野の枠をとっぱらった学際的なことが奨励され、特色になっています。私も経済系ですが、何でもやっています。

特に、近ごろマスコミでも取り上げられはじめている「地域通貨論」など、一般にもわかりやすいと思いますが、たとえば滋賀県草津市では、「オウミ(近江)」という名の地域通貨を使っています。近隣のコミュニティでサービス交換などのために、貨幣ではなく、これを使うのです。現在は全国で30カ所ほど、ひとつが20から300人くらいの小さなコミュニティですが、今後は波及して広がってゆく可能性があります。こういうことの可能性とか限界とか、を考えてゆくの私の専門とさせていただければと思います。

環境問題なども、消費者と生産者が直接、顔の見える関係、地域通貨で結んでみたらどうなるか、と考え、それがおもしろいと思って飛びつく人があると、実際にだんだん実現するのですね。常識というのは変わりうるな、というのがどんどん実感となって、例のベルリンの壁崩壊のように、突如、急激に変わってることがあります。それがとてもおもしろいですね。

さらに、玉野井先生のほか、先生の晩年の友人だったイワン・イリイチさんから多くを学びました。この人は、どこの国籍の人というカテゴリーを逸脱しているヨーロッパ人で、カトリックの聖職者だったのですが、ペルトリコで「解放の神学」に出会い、ヴァチカンと対立するようになったのです。私は大学院のときに、非常に影響を受けました。

そのなかで学んだことの一つに、行為と所有のちがいが、ということがあります。経済学が扱っている

のは、富の所有ということで、市場経済は行為を軽んじますね。しかし人間の欲求は、最終的には行為を通じて満たされるのです。社会システムは何とかして物をもたせようとします。ところが物をもつと、行為がしにくくなる。だから関わりを小さくして、行ないのほうを広げてゆこう、これが経済人類学のめざすところだと思います。

まあ、ここで、結論というわけではありませんが、人間は生きているあいだ、人間関係のネットワークが広がりつづけます。しかし、それはある意味では崩れ去ってゆくもので、たとえば、私も恩師との死別によって、ひとりで放り出され、その後は自分だけで歩いてゆかなければならなくなりました。

バッハ合唱団との関係も、いつの間にか20年も続いてきましたが、やはりこれからは大事にしてゆかなければならない、と思っているところです。

大村： ありがとうございます。多くの貴重な内容のお話が伺え、まだまだこれからも引きつづき、後の時間で伺いたと思います。ここで私の感想として、行為と所有の問題から引き出されたことですが、〈歌〉ということに関して少し言わせていただきます。

私たちは集まって合唱団の演奏をつづけています。この行為は、もちろん損とか得とかいうことではなく、私にとってはいちばん大事な、生きることの内容だと思われるのです。何ヵ月もかけて、練習を重ね、ソリストやオーケストラや多くの演奏家に働きかけ、ホールをみたく聴衆を集めて、一晩の演奏会をつくりあげます。

確実に残るのは、お金の面でいえば、またバザーを開いて埋めなければならない程度の赤字だけかもしれないかもしれませんが、聴いてくださったお客様のなかには、「また期待どおり大きなエネルギーを与えられました」と元気になって帰られる方々がたくさんいらっしゃる。何が残って何が残らないか、私たちには、たしかに存在するものが実感され、目に見えるということではないけれど、たしかに残る人生の豊かさというものがあります。その点、とくに音楽はほんとうに純粋で、私は生まれかわってもまた音楽で生きたいと思っているほどです。

丸山さんの狙っている人生の価値は、ここにしっかりつながるのではないかと。今日お話を伺って、そんなことを感じさせられました。

(おわり)

◇この後、ご出席の皆様から短いご発言をいただき、また場所を移した会食の席では、あまり時間にと

らわれない、自由なお話しあいが出て、そちらもなかなか、お伝えしないのは惜しいようなやりとりだったのですが、長くなりますので、ここまですべてで記録はとめることにいたします。

◇お客様（敬称略） 野村勝時・山本栄子・山本裕子・小杉茂雄・宇佐美桂一

◇出席者 総計 26 名

おたより

菅野 浩和（団友）

大村恵美子先生

東京バッハ合唱団の充実した御活動をおよろこび申し上げます。

毎月の月報をお送りいただきながら、いつもそのまま、申しわけなく思っておりました。月報に先生がお書きになられます信仰のこと、時代のこと、世相のこと、とても共感することが多く、教えられることもたくさんあり、感謝に耐えません。

とりわけ今回のマリア信仰に関する御文には、深い共感や、教えられることの多さを覚え、このようにその感銘をお伝え申しあげたく思いました。

昨今のルルドの聖母、近くでは秋田の聖母など、私どもにはどうしても理解しにくく、ついてゆきにくい信仰がひろまっていることに対する疑念が、御文を拝見して、すっきりと解けるような気がしました。

とりわけ最後の結びとしてお書きになっておられる“マリアの冠もマントも、バラの花も、ほとんどすべてが誤り”とありますのを拝見して、迷いの雲が晴れたような気がいたします。むしろガブリエルのお告げを受けて、みずからを“Ancilla Domini（主のはしため）”とへりくだり、“御旨のままに従います”と、全くの小さい、虚心の存在となった乙女、そして母マリアをこそ、マリアへのイメージの本質とするのならば、十分に共感でき、マリアの言葉ではありませんが、“従う”こともできるような気がします。

このような思いがけない、しかし貴重なお導きを下さいました大村先生に、深い感謝を捧げます。ありがとうございました。

おたより

松沢 望（団員）

7月2日の創立39周年のシンポジウムに出席させて頂き、ありがとうございました。全く分野の異なるお2人の方のお話、各々とても興味深くうかがわせて頂きました。しかもお2人が大村先生を通じて、東京バッハ合唱団に関係があるといういきさつは、とても心に感じました。20年も続いている事実もすごいことと受けとめました。

曹洞宗の禅宗は、前に仕事を手伝っておりましたアジアの問題の編集の場で、そのボランティア活動のことをよく耳にし、関心がございました。また経済上の問題も体験上感じておりました。お2人の先生によりしくお伝え下さいませ。

本の紹介 — 大村恵美子

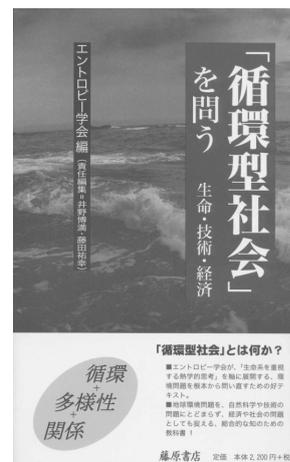
7月2日のシンポジウムが終わった直後、丸山真人さんから1冊の本が届きました。以前にご恵贈くださった『家事労働と資本主義』(B. ドゥーデン、C. v. ヴェルーホフ著。1986年訳)、『A. B. C—民衆の知性のアルファベット化』(I. イリイチ、B. サンダース著。1991年訳)など、丸山さんの訳書が、とてもむずかしい、とこぼしたので、「今回は少し読みやすい文章になっていると思うのですが…」というコメントと共に、さっそく送ってくださったのが：

『「循環型社会」を問う 生命・技術・経済』

アントロピー学会編。藤原書店、2001年4月刊

この春、東京農大の牧恒雄様からいただいた『スーパー農学110の知恵』のご本とよく似ていて、同志の方々が分担して市民のための連続講演をされた、その原稿が基本となっているようです。素人の私が、いくら精読しても、理解には限界がありますので、多くの方々に本の紹介という形で、書かせていただこうと思います。スーパー農学のグループといい、アントロピー学会の方々といい、将来の地球存続への、地道な研究にはげんでおられることで、ともすれば、政界などの表面的なお寒いなりゆきばかりに、耳目をうばわれがちの私たちに、心強さをとりもどして下さることに、大きな喜びをおぼえます。

内容としては、



I 生命系と環境 (3つの論文)

II 技術と環境 (4つの論文)

III 経済と環境 (3つの論文)

IV 社会と環境 (2つの論文)

から成り立っていますが、いずれも興味津々のものばかり。そのうちの4つから、私が共鳴し、短い引用文だけでもひろくアピールしそうな箇所を、ご披露するにとどめます。直接お読みいただけることを期待します。

1 循環と多様性—生命系の視座

柴谷篤弘 (物理学)

「循環しない生物はない。我々が見ている生物は、すべて循環の結果、今ここにある。ですから、循環を保証しなければ生物というものは存在しえない。それが生物を見るとき第一の視座です」

「1960年以後、石油のエネルギーを使って人間が何をしたかという、速度を上げた訳です」「産業革命以来、最初は石炭、次に石油や電気や、エネルギーを使ってすべての速度を速めた」「環境における生物の保全ということを考える場合に、人間の都合だけで自然に関与しては相成らぬ、というのが基本です」「人間の自然に対する関与がかなり大規模であって、しかも毎年同じ周期でやらなかったら、生物と人間は共存できなくなる。これが循環の観点です」「日本でもエントロピー論的なアイデアで地球全体の生態系を考えようという話が進んでいます」。

3 生命にとって環境とは

勝木 渥 (物理学)

「生命とは、自分が生きていくとき、生きていく(=いわば、自分が清浄(きれい)になる)以上に、もっと環境を汚すことによって、つまり、生命系でのエントロピー減少量を上回るエントロピーを環境に排出して、環境のエントロピーを増大させる(=環境を汚す)ことによって、生きていくことができるのです。これが、科学的な環境理論の出発点です」。

「いま、何となく良心を売り物にするような考え方『人類は地球の癌のような存在(だから、亡びるべき)である』といった類の反語的・みせかけ自虐的な命題が振り回されたりもしますが、本当はそうではないはず。人類の振る舞いが地球にとって癌のようだったのは、今の社会がそのような振る舞いに誘導するようなシステムになっているからであって、人類の存在自体が本来、地球の癌だといったものではないはずだ。問題の解決は社会的システムの変革に求めるべきであって、人類の消滅に求めるべ

きではない、というのが私の考えです」。

「地表のことを考える段階で、地表と上空の間の水循環の存在を認識する。その中で、もう一段内側の生命系に着目して、生命系はその環境から水と炭水化物を受け入れて、高エントロピーにして棄てているのだと認識する。そして、さらにその内側の次の段階へと考察を進める。こういう具合に認識を進めていってこそ、認識は深まっていくのいだろうと思うのです」。

5 技術—できること・できないこと

井野博満 (金属材料学)

「自然の物質循環というサイクルと、いわゆるリサイクルとは区別すべきであるというふうに思います。それを区別するために『自然』をつけて『自然サイクル』、これは自然に物質循環が進むということ。それから、リサイクルには『人工』をつけて『人工リサイクル』。人間が助けてやってリサイクルする。人間が手をかけてやらないと実現しないのがリサイクルである。自然のサイクルは、うまく循環して、エントロピーを地球外へ捨てる。それに対して、リサイクルってというのは、うまく循環に乗らない。それで、毒物を出すとまずいので、その場合は、中で完全にリサイクルする、外に出さないということを考えなければいけない。しかし、完全にということはできないので、毒性の高い物質は使うべきでない」「今後どういうふうに材料を生産していかなければならないか。それには次の4つの方向があります。

- ①自然循環できるマテリアルをつくる
- ②リサイクルしやすいマテリアルをつくる
- ③長寿化やカスケード使用で生産を縮小させる
- ④毒物の使用禁止」。

「技術についていえば完璧な技術は存在しないということですね。それで、事故の確率がゼロに近くても、大事故が起こりうるような技術は使うべきではないと思います」。

「日本でも原子力開発の初めの頃に事故評価というのをやっていて、国家予算の倍ぐらいの被害がでると試算を政府の審議会が出しています。これは最近わかったことです。とり返しのつかない被害になります」。

「今後の技術の問題を考えてゆく上で、また人類の生存、持続可能性を考えてゆく上で有機農業の再生という、農業問題は非常に重要だと強調したい。農的システムを組み込まねば、廃物処理とリサイクルシステムは完結しない。これがエントロピー理論の一つの帰結であるわけです。そうすると現在の農

業、農薬と化学肥料に頼っている農業はだめです。それから遺伝子組み換え作物です。今のところはどうなるかというのは、わからないのですが、種の壁を超えた遺伝子組み換えが環境に影響を及ぼすとわかったときには、もうとり返しがつかない。

6 環境とエネルギー—原子力の時代は終わった

藤田祐幸（物理学）

「世界全体で見ると、原子力はすでに斜陽産業です。新規の原発建設計画は、原子力先進国ではすでにゼロです」。

「原発がなくとも電力はほとんど既設の発電システムで供給可能であること、将来的には天然ガスを使ったガスマイクロタービンや燃料電池によるエネルギー革命が起こるであろうこと、などを述べてきました」。

「戦後のどん底からの立ち上がりは、1950年代に始まります。そして60年代に本格的に始まった石油時代に、この国のエネルギー消費量は爆発的に増加を始め、2度のオイルショックをもともせず、現在もまだ暴走過程のただ中にいます」。

「こういう暴走状況を前提に、原発がなくとも大丈夫だとか、天然ガスは十分あるから大丈夫、という議論をしている場合ではないと、私は思います。これは典型的な自滅の系です。制限制約と環境制約の二つの制約を突破したとき破局がやってきます。どこまで行けば人々は満たされるのでしょうか。無限の欲望の充足はありえないことは明らかです。『進歩・発展・成長・競争』といった戦争経済のスローガンから解放される必要を感じます」。

「独占による放漫経営に毒され、経済性を無視して国策としての原発推進に過度に依存してきた日本の電力産業が、外国資本との競争に生き残ることは大変困難であると思います。このような内外の状況を見れば、国際的に孤立してまで原子力にしがみついている場合ではないのです。たそがれ産業、斜陽産業と化してしまったこの状態は、内部の人間の精神的荒廃を招きます。データの捏造事件や1999年のJCOの事故などはその現われだと思えます。この退廃は大事故を引き起こす引き金になります。これを未然に防ぐのに必要なのは人間の理性だけだと思います」。

10 地域通貨—環境調和型経済を構築するために

丸山真人（経済学）

「最近は……日本銀行券や補助貨幣以外にも、地域レベルで流通する貨幣があってもいいのではないか、

という問題に関心が集まるようになりました」。「もともと江戸時代には金銀銅の正貨のほかに各地で藩札が発行されており、地域通貨として藩内を流通しておりました」。「地域によっては上手に藩札を運用していた事例に出会うことができます」。「私たちの先祖がローカル・マネーを使っていたということは、歴史的な遺産としてこれから見直されていくのではないかという予感が致します」。

「人間の欲望には二種類あることに注意しましょう。その二種類のうち経済学は一つしか注目してこなかったと思われるからです。……行為や存在に関わる生命欲（ここではしておきます）と、所有に関わる所有欲です。……根源的欲求は所有欲ではなく生命欲でなければならないはずです」。「生命欲というのは生活そのものを自立させ、自立＝自存に向かわせるという方向性をもっております」。「それに対して所有欲というのは商品をより多く所有するという欲求ですから、当然のことながら経済成長に結びついていきます」。「欲求充足の選択基準を所有欲から生命欲の方向に転換するということによって、必要でないものは作らなくてよいという生活スタイルが決まってくると、環境問題を解決する上で一つの展望が開けるのではないかと思います」。

（カナダ・イギリスなどの）「LETS（地域交換・取引システム）とは何かといいますと、あらかじめ会員登録をしたメンバーの中で、グリーンダラーと引替えに財やサービスを交換し合う仕組みです。LETSの事務局はメンバーの口座を管理していて、メンバー間の取引の記録をもとに、口座の付け替えを行なっています。銀行の当座預金と少し似ていますが、銀行と違うのは原則として現金を入れる必要がないということです」。

「LETSに参加している人たちが消費者としての立場を越えて、生産者としてその地域に貢献する、そして地域の人が生産者同志として向かい合うことで、今までは所有欲を満たすために消費者として行動していたのが、むしろ生産者として地域に貢献するようになる。これがポイントだと思います」。

「おそらく日本においても、潜在能力としてLETSを受け入れる環境が整いつつあると思います」。「いまや地域通貨の普及は政府をも巻き込んだ運動として発展する可能性が出てきたと言ってよいでしょう」。